

国書版

島木健作全集

第十五卷

島木健作全集

第十五卷

国書刊行会版

島木健作全集 第十五卷

昭和56年9月10日 印刷

昭和56年9月20日 発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著 者 島 木 健 作

著作権者 朝 倉 京

発行者 佐藤今朝夫

制作・尾沼 汎

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京—5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

監修

稻垣達郎

小林秀雄

中村光夫

編集

大久保典夫

小笠原克

高橋春雄

第十五卷 目次

日記……………一

世田谷日記……………三

伊豆日記……………二

昭和十八年日記……………一五

扇谷日記……………二七

昭和二十年日記……………四一

書簡……………三三

大正八年……………一三

大正九年……………一四

大正十四年……………一五

昭和三年……………一七

昭和十年……………一六

昭和十二年	一六
昭和十三年	一六
昭和十四年	一六
昭和十五年	一六
昭和十六年	一六
昭和十七年	一六
昭和十八年	一六
昭和十九年	一六
昭和二十年	一六

對談・鼎談・座談會

放談會 (島木健作・丹羽文雄)	二五
鼎談 革新期の文學 (林房雄・武田麟太郎・島木健作)	二六
鼎談 文化と自然 (三木清・阿部知二・島木健作)	二九
座談會 青年學生に待望す (三木清・島木健作・佐藤信衛)	三五
對談 生活者の文化 (島木健作・阿部知二)	三七
對談 (岸田國士・島木健作)	三三

對談	地方文化建設への提言（島木健作・上泉秀信）	四四
對談・鼎談・座談會一覽		四四
書誌		四五
年譜		四五
自撰		四七
年譜		
高橋春雄編		四五
解題		五三
索引		

日

記

世田谷日記

三月×日

早朝起きて、「日本評論」のための雑文、「病因の處遇について」を書きはじむ。どうしても今日一日で書きあげてしまはねばならぬ。長篇「再建」のこの月の分がまだ三分の一ほど残つてをり、あと二三日はその爲に費さねばならぬからである。事實をそのまゝ何等の修飾なしに書くのだから、速度は早い。午前中に十二枚書き晝にちよつと休んでまたつづける。書き進んで行くうちに、あそこで病を得、死んで行つた友人の顔が眼光にちらちらする。死ぬべくも見えなかつた彼らは死に、自分はこゝにかうしてゐる。何かにつけてこの陳腐な感慨から、僕は逃れることができぬ。それは僕を悲しませ、同時に又、僕に仕事をさせる力ともなつてゐる。たとへ感傷的なものであるにしろ、俺は生き過ぎたんだ、とふつと思ふ時ぐらゐ、猛然と新たな力の湧き上つてくる時はない。

夜に入り、よほど遅くなつて、脱稿。半ピラ五十八枚になる。一應讀んでみる。あそこにも、こゝにも、書くべきことをおとしてゐる。しかし今さら入れるわけにはいかぬ。どうせ自分の刑務所内での見聞をこゝにすべて書き綴るわけにはいかぬのだし、今後僕も僕は機會ある毎に書くつもり故、その時にと思つて心を慰めた。僕はかねてから、發表などといふことは考へず、又、必ずしも小説の形式ではなしに、僕自身の、「死の家の記録」を書き残しておきたいと考へてゐる。印象の餘りうすれぬうちに、又、細かな事實を忘れ

ぬうちに、暇々に少しづゝ書いておきたいと今日、あらためて考へた。

今日はじめて半ピラの原稿紙を使つてみたが非常によかつた。四百字だと前の方を無駄にしたときあとの方も棄てることになるので、經濟を考へて、半ピラにしたのだが、これだと一枚々々めくる速度が早いので、なんだか澤山書けたやうな氣がして、彈みがついて、能率が上るやうに思ふ。但し、小説の場合は、紙面の感じがちがつて少しまごつくかも知れぬ。

時計がとまつてゐて何時であるかわからぬ。床の中に腹ばつて、少し残つてゐる、「下界の眺め」を讀了す。いひたいことが非常に多い。「文學界」今月の座談會は、「夜明け前」といふことになつてゐる。この次は、「下界の眺め」などを中心に、最近の長篇小説について語つて見たらどうか。昨年、ジャーナリズムはちよつと、長篇の批評を取り上げたが、それつきりだ。今度の「文學界」の例會に提案して見ようとおもふ。疲れて眠る。心身共に疲れてゐるやうだ。しかし、昔はもつとひどかつた。今はいい方だ。これから暖かくなるし、身體もよくなるだらう。昔は寒いうちがよく、暖かくなると弱つたが、こゝ三四年それが反對になつて來たのは面白い。心藏に耳をすますと、やはり百は打つてゐる。

三月×日

「再建」の續きを書くべきか、「夜明け前」の二部の残りを讀了すべきかに迷ふ。「夜明け前」にきめ、午後迄かかつて讀み終へた。今日は六時から銀座のラスキンで、新協劇團の、脚本「夜明け前」の批判會があり、僕も出る事になつてゐるので、原作を讀んでおく必要があるのだ。それから、村山の脚色を讀む。一讀、

無理な芝居だとの感は、誰しも最初抱くだらうが、第一部の相當の成功を見てゐる僕は、公式的な戯曲理論では律し得ぬものがあらうとおもつた。

雲がふり出し、風さへ出て來た。出かけやうと思つてゐると、勞働雜誌社の、國吉君來る。「勞働雜誌」一周年紀念號のために原稿を書くことを承諾。同雜誌經營のための僕の援助は、月末まで待つてもらふこととする。最近やうやく赤字を克服したと。喜ばしいことだ。要談を終へてから二人で時局論を闘はす。時局の認識について、二人の間には多少の相違があるやうだ。三十分經ち、おどろいて一緒に家を出る。

遅れて行つたので、批判會はもう始まつてゐた。遅れて行きながら、愚にもつかぬ、當事者を何等益さぬやうなことを二三しやべる。いつもの事ながら會が終つてから後悔した。僕は自分のいふことなど、人を益するとはおもはぬので、かういふ會には、もう出まいと、時々決心することがあるのだが、アテにしてゐる（ゐないかも知れぬが）主催者にすまぬやうな氣がし、殊に仲間の仕事だと出ねばわるいとおもつて、その日になるとやつぱり出て行く。昔の組合生活での習慣もあるし、自分のやうに生活の狭いものは少しでも多くいろいろな人に接觸した方がいゝとおもふことも手傳つてゐる。

會後、中野君をとらへ、時局についての彼の意見を叩く。

林君に少し話すことあり、二人連れ立つて外へ出る。彼が行きつけらしい酒場へ行く。僕は酒は吞めぬので、南京豆ばかりかちつてゐた。別に議論にもならず、話をすることができた。彼は書いたものを通して見るよりははるかに複雑な男である。本人を前にして、無遠慮な林の人物論をやつたが、全的にはうけがはなかつた。彼の作品についての僕の意見は承認した。

十一時すぎ家に歸る。青森の田舎の妻の家から林檎を送つて來てゐた。なかに「印度」あり。向ふはもう

そろそろ鯨の季節であらう。生乾せの身缺き鯨に味噌をつけて喰ひたい。

人民文庫、創刊號をよむ。さきの一冊は人が持つて行つて了つたので、あらためて買ったのである。荒木君には久しく逢はぬ。「生きんとする兩人」は、彼のものとして僕は人がいふほど高くは買はぬ。批評を紙に書く氣はないので、逢つたら、とおもつてゐるうちに時が経つて了ふのでなんにもならぬ。「神樂坂」を讀んで、感心した。感心したとたんに不滿の念の起つたことも亦事實だが。

三月×日

朝起きて、ふと思ひつき、文學界社の式場君に速達を出す。三四日後の「文學界」の座談會はもとより文學の爲の會に過ぎぬが、今の狀態故、一應、地元の警察の意向を聞いておいた方がよろしからんといふことについてである。これは二三耳にした前例もあることだから。「再建」の残りを書き進む。これは何れ「純粹小説全集」にはいることになるのだが、あの全集にはいることは、出版元や、讀者の迷惑ではないかところごろ思つてゐる。ずらりとならんだ十四人のうち、僕だけ未熟なのはやむを得ないが、書いてゐるものもほかの人とは餘程毛色がちがふ。他の諸氏のは、新聞紙上に連載されたもの多く、それだけに、一氣に讀ませる面白さを持つてゐるが、僕のはさうはいかぬ。僕とて、都會を舞臺に、今日の時代のインテリの群でも書けば、少しは面白く讀まれるとおもふが、「再建」はさういふものではない。退屈せずに讀んでくれる人はどれだけであらう。平常僕らの書くものは、出版屋も限られてゐるし、限られたプロ文學の讀者以外に讀まれる機會は少いので、さういふ機會がある時は遠慮しない方がいいと思つてゐた、純粹小説全集に僕が入

つたのもその爲だったが、それにしては、「プロ文學の讀者以外」に與へる贈物としては、少し見當ちがひだつたかも知れぬ。

新人批評家の丁君來訪。だいぶ前に病氣であるやうに聞いてゐたが、逢つて見ると元氣であつた。いろいろ話の末に、二・二六事件當時、君は逃げたとの噂が一部にあるが、と聞かされる。僕はさういふことはない、何かの間違ひであらう、と答へた。逃げたものがあるとして、逃げたものより逃げぬものが何もえらいわけでもないから、躍起となつて辯解するには當らぬ事故、たゞ事實だけを告げ、噂さの行はれてゐる方面などについては聞きもしなかつた。逃げたものと、僕とでは、事件そのものの、當時の狀勢、及、おのれ自身についての認識がちがふだけのことだ。あゝいふ際に於ける各個人の、臆病だとか臆病でないとかいふことも、僕は大了したことだとおもはぬ。二十六日は僕は一日ぢゆう家にあつてものを書いてゐた。外に出せず、ラヂオも備へてをらぬ僕は何も知らずにその夜は寢てしまつた。二十七日朝になつて始めて事件を知つたといふ迂闊さ加減故逃げねばならぬものだつたらすでおそいのである。二十七日は、十一時頃、良い着物を着、袴をつけて外出。この日はかねて神田の某學院で、文學の話をするをたのまれてゐたからである。生徒は少なかつたが一時間ほど取り止めのないことをしやべつて退出。ナウカ社に至り、大竹博吉氏に逢つて、稍詳しい情報を聞き、それから戒嚴司令部のあたりを一寸見て、日暮頃家へ歸つた。二十八日は電話で大竹氏に情報を聞いて家にゐたが、ふと、昨日、各雑誌が編輯方針について迷つてゐると聞いたのをおもひ出し、「文學界」も事務の人が弱つてゐるだらうとおもひ、本郷の文學界社に出かけて行つた。この月から僕は編輯當番だからである。式場君に逢つて、既定方針でやるやうにといふ。同人の誰かが來るかとか長く待つたが、來ないので、今後の狀勢の如何では、小林、阿部兩氏と逢つて相談せねばならぬが、今の

ところいいだらうといひ、そこを出、街の様子を少し見て歸つた。夜、近所に森山君を訪ふ。机の上に書きかけの原稿がある。彼は全くどこへも出なかつたといふので、僕の耳にした情報を告げた。彼はそれを基礎に、理論家らしく考察を進め、結論を出してゐた。その時文學の仕事をどのやうにして進めて行くかといふことについて話す。二十九日は朝から森山君のところへ行き、彼のところのラジオを聞いてくらしした。三十日以後、普通の生活。僕の四日間はいかゞの如く平々凡々だつた。今になつて街の中をもつとよく觀察してゐるけばよかつたと思つてゐる。

T君と、彼が屬してゐる同人雑誌の作家の仕事について少し話す。宮内寒彌のこと、森田素夫のこと、その他。

T君が歸つてから、原稿を書きつづけ、夜にいたつて脱稿。前からの分と合して四十七枚となる。

三月×日

仕事一段落つきのびのびとする。犀星の「復讐」を読み了る。

外が暖かさうだ。ふと思ひついて、富士山を見に行く、といふと大げさだが、豪徳寺の境内を通り抜け、原ツパを横ぎり、小川のちよろちよろ流れるところに出ると富士山がよく見えるのである。しかし今日は残念ながらかすんでゐて見えなかつた。原ツパでしばらくひとり遊んで歸る。

同人雑誌をよむ。同人雑誌で一番いやなのは雑誌をやる態度がフラついてゐるのを見ることだ。たとへば、既成文壇の文學にはあきたらぬから、新しい文學の建設のためにこの雑誌をやる、とはつきりした態度を示

しておきながら、一方、おなじその號のどこかで、たつた今輕蔑した既成文壇に色目をつかつたりしてゐる類である。かういふのを見ると、もうその雑誌をよむ氣がせぬ。既成文壇の某が、何かの雑誌の隅でちよつとばかりほめた言葉を梓をつけて轉載したり、おなじさういふもの、お義理に書いたやうな文章をありがたがつてのせるやうなことはやめた方がいい。同人雑誌を既成文壇へ出る爲の足がゝりとするんだつたら、それは何も恥ずることはないから、はじめからさういふ態度をハツキリさせた方がいい。既成文壇だとか新文壇だとかさういふことに拘泥せぬを、僕は一番だとおもふが。

大したことでもないかも知れぬが、同人雑誌を見てゐて、ペンネーム（だらうとおもふのだが）のえらび方の拙さが眼について仕方がない。もう少し細かな感覺で名をえらんだらどうだらう。よい作家は、よい名を持つてゐるやうに僕はおもふ。もつともいい作家になると、名前がよく見えてくるのかも知れないが。

「小説」三月號の文藝時評で、伊藤永之介君が、僕の作品評に關聯し、思想と感覺との矛盾といふことをいつてゐる。ぼくは早く氣づいてゐることだし、とくに教へられることはなかつたが、正しいことをいつてゐるので感心した。僕がこのごろ、今さららしく生活と文學といふやうなことを言つたのもこの矛盾を感じてゐればこそである。この問題については僕はいひたいことが多い。

夜、金子と君來訪。生活の問題につき、僕の意見を徴せらる。いろいろ話した。それより文學談。同君はいはゆる内省時代のプロ文學はもう揚棄せらるべきであるとの意見で、その見地からこの時代の作品を批評してみたいといひ、中野、村山、それから僕をその對象にえらんだといふ。僕は僕の知つてゐる限りの、中野村山の最近の作品について彼に語つた。

僕は朝鮮の人から手紙をもらふことが多い。そのうちに、昨年中手紙をくれた人で、そのいつてくること

の、非常に立派なのに、今も忘れずにゐる若い女の人がある。僕はその人のことを思ひ出し、話して見たら、金子と君は、間接に知つてゐるさうだ。すぐれた人だが、狭く、深く考へすぎて、身動きがとれずにゐるらしいといふ。僕が手紙で感じたのもそのことだつた。近況を訊ねて見ようかとおもふ。

三月×日

立野の「流れ」を讀了。非常に面白く、休みなしによんだ。彼はやはり長篇作家なのであらう。しかし、どうも少し整理されすぎ、あつさりしすぎてゐはしないか。もつと書きすぎたり、くどかつたり、ごてごてしたところなぞがあつていいのではないか。もつとケタをはづす必要がある。

散歩に出、古本屋から、「名勝温泉案内」なる一本を求めて歸る。ねころんで、ぼんやりくりひろげて見てゐる。春になつたら母を一度どこかへ連れて行きたい、などとおもふ。そんなことができると思へば今のうちだとの感がひしとする。

雑誌「明朗」より原稿依頼。先月は書けなかつたので今月は書かねばならぬ。しかし二十枚の小説に何を書いたらいいものか。また一ト苦勞だらう。

未知の人より、身の上相談の手紙來る。かういふものにたいし、自信ありげな言葉でなぞ、今の僕になにが書けるものか。

モスコウ・ニュース着。ポオ、ホイットマン、ドイツケンス、スターンなどが、續々翻譯、出版されてゐることを報じてゐる。